災害訓練への参加を通しての看護学生の災害看護についての学び

Learning about disaster nursing of nursing student through participation to disaster training

原田　秀子*Hideko Harada
田中　周平*Syuhei Tanaka
張替　直美*Naomi Harikae

要旨

本研究は、Ａ市で行われた災害訓練、および災害活動に携わった医療福祉専門職を招いての研修会への参加とメディカルラリー見学を通しての看護学生の災害看護についての学びを明らかにすることを目的として、訓練に参加した看護学科学生５名を対象に、インタビューを行い、逐語録の分析を行った。１．災害看護の学習経験や活動経験では、【これまでの災害看護の学習経験や活動経験】【災害ボランティア体験を通してみえてきたもの】【災害看護の実際を見聞きすることでの理解の深まり】【災害看護への関心の高まり】【日頃からの地域住民とのかかわりの希薄さ】【災害に対する危機感の薄さ】の６つのカテゴリーが抽出された。２．訓練および研修参加を通しての学びでは、【災害に生かせる応急処置の体験】【地域住民との日頃からの関わりの重要性】【参加団体（職種）の役割を知る】【被災者を支えるボランティア支援の重要性の理解】【被災者と地域住民への配慮の重要性】【緊急場面で求められる医療職の能力】【緊急場面で必要な職種間の連携】【多様な訓練場面設定からの学び】の８つのカテゴリーが抽出された。３．災害看護についての今後の学習への関心では、【被災者のケアへの関心の高まり】【訓練参加の必要性】【被災者の支援に必要な能力の不足】【応急処置の習得への意欲】【ボランティア活動への意欲】の５つのカテゴリーが抽出された。訓練や研修会への参加を通しての災害看護への理解の深まりが学習意欲や関心を高めることにつながる。よって、様々な経験の機会を教育に取り入れていくことが必要である。

キーワード：災害看護、災害訓練、看護学生
Key words：Disaster nursing，Disaster training，Nursing student

Ⅰ．はじめに

東日本大震災での津波による被害は甚大であり、さらに福島の原発事故による被害の影響も測り知れない。このような現実を目の当りにして自然災害や人的災害の発生への備えはますます重要なものになっている。看護基礎教育の中でも災害看護の教育は重要視されてきており[1)]、災害看護の科目を新設する学校も増えてきている。災害看護の教育における教育方法の工夫として様々な実践報告もなされている。大規模な災害訓練に学生を参加させることでの学びを共有したり[2)3)4)]、緊急時のアセスメント能力を身につけるためにトリアージ訓練[5)]を実施したり、避難所で必要な看護を学ぶために避難所体験を実施したり[6)]と、体験を通しての学びを重要視した報告も多い。

当学に近接する地域でも２年前に豪雨災害が発生し、大きな被害をもたらした。身近な被災経験は災害看護に対する関心を高めることにつながると考えるが、ボランティア活動に参加した学生は限られていたのが現状である。今回、豪雨災害の被災地であるＡ市で行われた災害訓練、および豪雨災害時に支援活動に携わった医療福祉専門職を招いての研修会に学生が参加する機会を得た。さらにメディカルラリーに見学者として学生が参加する機会も得た。そこで、参加した学生の学びを明らかにすることで、当学における災害看護教育についての示唆が得られると考え研究を行った。

Ⅱ．研究目的

Ａ市で行われた災害訓練、および災害活動に携わった医療福祉専門職を招いての研修会への参加とメディカルラリー見学を通しての看護学生の災害看

＊山口県立大学看護栄養学部看護学科
Department of Nursing, Faculty of Nursing and Human Nutrition, Yamaguchi Prefectural University

護についての学びを明らかにする。

Ⅲ．研究方法

１．期間

2011年８月～12月

２．対象

Ａ市で行われた災害訓練、および災害活動に携わった医療福祉専門職を招いての研修会への参加とメディカルラリー見学を行った看護学科３年生３名と４年生３名のうち同意の得られた５名とした。

３．データ収集方法

訓練参加から１週間以内に、研究者の研究室において１人30分程度の個別面接を行った。データ収集は半構成的面接法を用いた。インタビュー内容は、これまでの災害看護についての経験、訓練参加の経緯、訓練参加しての学び、災害看護について学習を深めたいことを大まかに抽出し、それぞれについて自由に語ってもらった。インタビュー内容は、同意を得て録音し、語られた内容や観察記録を逐語化しデータとした。

４．分析方法

分析に際して、インタビュー内容を大きく１．災害看護の学習経験や活動経験、２．訓練および研修参加を通しての学び、３．災害看護についての今後の学習への関心の３つの内容に分け、それぞれについて以下の手順で分析を行った。インタビューの分析は、災害看護について語られた内容について、意味がわかる文節ごとに分け、その意味内容を示すものをコードとし、それぞれのコードの共通性と相違性にもとづいて分類しサブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。

５．倫理的配慮

倫理的配慮として、研究への参加は任意であること、研究に参加することに同意しない場合でも、不利益を受けないこと、個人情報の保護、インタビュー内容を録音させてもらうが、分析終了後はすぐに破棄すること、研究成果の公表などについて文書および口頭で説明し、同意書への署名をもって同意とみなした。

Ⅳ．災害訓練と研修会の概要

１．災害訓練の概要

2011年８月21日、Ａ市で開催された災害訓練に対象学生６名と教職員２名が参加した。訓練は、M8.5規模の東南海・南海地震が発生したという設定であった。Ａ市内においても震度５弱が記録され、地震による津波警報発令をうけ、避難指示が出され、沿岸にある老人福祉施設の入所者を避難所となる中学校体育館まで避難させるという想定で訓練が行われる予定であった。しかし、当日朝の悪天候により避難訓練は中止となり、避難所となる中学校体育館での訓練参加団体が設置したブースへの参加のみとなった。

２．メディカルラリーの概要

メディカルラリーとは、医療チームが特殊メーキャップを施した模擬患者を診察し限られた時間内に的確に治療ができるかを競う技能コンテストのことである。参加チームは、自然災害や事故など実際の現場を再現したシナリオステーションを順番に回り必要な処置を行い、評価・採点を受ける。対象学生は、県内で開催されたメディカルラリーに見学者として参加した。

３．災害研修会の概要

Ａ市で２年前に発生した豪雨災害の際、主にボランティアセンターの立ち上げと運営に携わった医療福祉専門職を招いての研修会を開催した。

Ⅴ．結果

対象者の面接回数は１回、平均面接時間は30分であった。

分析の結果、全コード数は94、そのうち、災害看護の学習経験や活動経験は39コード、訓練および研修参加を通しての学びは35コード、災害看護についての今後の学習への関心は20コードであった。以下、３つの内容に分けて分析結果を述べる。なお、カテゴリーを【　】、サブカテゴリーを＜　＞、コードを≪≫で示す。

１．災害看護の学習経験や活動経験（表１）

災害看護の学習経験や活動経験では、【これまでの災害看護の学習経験や活動経験】【災害ボランティア体験を通してみえてきたもの】【災害看護の実際を見聞きすることでの理解の深まり】【災害看護への関心の高まり】【日頃からの地域住民とのかかわりの希薄さ】【災害に対する危機感の薄さ】の６つのカテゴリーが抽出された。

１）【これまでの災害看護の学習経験や活動経験】

このカテゴリーは、＜災害看護についての経験の

表１　災害看護の学習経験や活動経験　（　）コード数

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
これまでの災害看護の学習経験や活動経験（26）	災害看護についての経験の少なさ(8)	学習経験の少なさ（3）
		活動経験なし（5）
	災害ボランティア活動への関心の薄さ（3）	災害ボランティア活動への関心の薄さ（3）
	身近な被災経験（6）	被災状況（3）
		被災による自分の生活への影響（3）
	災害ボランティア体験（9）	災害ボランティア体験（5）
		ボランティアへの参加者（1）
		ボランティアのきっかけ（3）
災害ボランティア体験を通してみえてきたもの（15）	ボランティアが機能するための仕組み（7）	ボランティアの活動拠点（5）
		ボランティアが機能するための仕組みを知る（1）
		ボランティアセンターへの要望（1）
	被災者の置かれた環境への配慮（7）	被災者の置かれた環境を知る（2）
		被災者の置かれた環境への配慮（3）
		ボランティア活動に必要な気遣い（1）
		被災者のニーズ（1）
	把握が難しかった看護職の活動（1）	把握が難しかった看護職の活動（1）
災害看護の実際を見聞きすることでの理解の深まり（5）	災害看護の実際を見聞きすることでの理解の深まり（5）	被災地の状況についての学習（1）
		身近な被災経験を聞く（1）
		身近な被災経験を聞くことでの理解の深まり（1）
		実習で見聞きした災害時の看護活動の実際（1）
		災害における保健師の役割の重要性（1）
災害看護への関心の高まり（23）	災害看護の実際を見聞きすることでの災害看護への関心（6）	東日本大震災での看護職の活動を見聞きしたことによる関心
		ボランティア体験から生じた災害看護への関心（2）
		講義で聞いた災害看護の話（1）
		テレビではわからない被災者の状況と援助の必要性の理解（1）
		身近な被災経験を聞くことによる災害への関心（1）
	急性期における看護への関心（5）	急性期における看護への関心（3）
		救急時の連携への関心（2）
	被災者の心のケアへの関心（2）	被災者の心のケア（1）
		心のケアを必要とする身内の存在（1）
	学習経験の広がりへの期待（5）	学習経験の広がりへの期待（2）
		緊急時の対応を学べるという期待（2）
		地域住民の訓練参加への期待（1）
日頃からの地域住民との関わりの希薄さ（9）	日頃からの地域住民との関わりの希薄さ（9）	地域住民とのかかわりの希薄さ（7）
		小学生の時はみられた地域とのつながり（1）
		災害時に助け合えない関係（1）
災害に対する危機感の薄さ（4）	身近な被災経験がないことでの危機感の薄さ（1）	身近な被災経験がないことでの危機感の薄さ（1）
	災害を身近にとらえることの難しさ（3）	被災状況の映像のリアルさの驚き（1）
		住んでいる地域の被災は想定外（2）

少なさ＞＜災害ボランティア活動への関心の薄さ＞＜身近な被災経験＞＜災害ボランティア体験＞の４つのサブカテゴリーで構成された。

＜災害看護についての経験の少なさ＞では、大学の授業の中での学習機会が限られていたこと、災害に関わる訓練やボランティア活動への参加の経験がないことが語られていた。＜災害ボランティア活動への関心の薄さ＞では、身近で災害が起こっても自分の生活に影響がないと、ボランティア活動への関心が薄かったことが語られていた。＜身近な被災経験＞では、身近で災害が起こり、自分や家族の生活に何らかの影響があったことがリアルに語られていた。＜災害ボランティア体験＞では、身近で災害が起こった時に看護学生としてボランティアに参加するまでの経緯や活動内容が語られていた。

２）【災害ボランティア体験を通してみえてきたもの】

このカテゴリーは、＜ボランティアが機能するための仕組み＞＜被災者のおかれた環境への配慮＞＜

把握が難しかった看護職の活動＞の３つのサブカテゴリーで構成された。

＜ボランティアが機能するための仕組み＞では、ボランティアに参加することで、ボランティアがスムーズに動けるための拠点づくりや運営の実際を知ったことなどが語られていた。＜被災者の置かれた環境への配慮＞は、被災者の置かれたプライバシーが保たれない環境に対して、被災者宅で活動するボランティアとして何らかの配慮や気遣いが必要であることが語られていた。＜把握が難しかった看護職の活動＞は、がれき処理のボランティア活動をしていたので看護職の活動についてはよくつかめなかったことが語られていた。

３）【災害看護の実際を見聞きすることでの理解の深まり】

このカテゴリーは、＜被災体験を見聞きすることでの理解の深まり＞の１つのサブカテゴリーで構成された。主な内容として、看護師や保健師の活動の実際を写真で見たり、身近に被災された方の体験を聞いたりすることで理解につながったことが語られていた。

４）【災害看護への関心の高まり】

このカテゴリーは、＜災害看護の実際を見聞きすることでの災害看護への関心＞＜急性期における看護への関心＞＜被災者の心のケアへの関心＞＜学習経験の広がりへの期待＞の４つのサブカテゴリーで構成された。

＜災害看護の実際を見聞きすることでの災害看護への関心＞では、身近な被災体験を聞いたり、ボランティア体験等を通して関心が高まったこと、それが今回の訓練参加につながっていたことが語られていた。＜急性期における看護への関心＞では、トリアージや救急場面での看護に関心を持っていることが語られていた。＜被災者の心のケアへの関心＞では、自分のこれまでの実習経験等から心のケアの大切さに気づき、それが被災者の心のケアへの関心につながっていることが語られていた。＜学習経験の広がりへの期待＞では、災害看護への関心が学習経験を広げたいという気持ちの高まりにつながり、それが今回の訓練参加につながっていたことが語られていた。

５）【日頃からの地域住民との関わりの希薄さ】

このカテゴリーは、＜日頃からの地域住民との関わりの希薄さ＞の1つのサブカテゴリーで構成された。主な内容として、日頃からの地域住民との関わりが希薄なことで、災害時に助け合える関係ができていないことについて語られていた。

６）【災害に対する危機感の薄さ】

このカテゴリーは、＜身近な被災経験がないことでの危機感の薄さ＞＜災害を身近にとらえることの難しさ＞の２つのサブカテゴリーで構成された。＜身近な被災経験がないことでの危機感の薄さ＞では、地元で災害が起こっても自分の生活に影響がないと危機感が薄いことが語られていた。＜災害を身近にとらえることの難しさ＞では、メディアを通して東日本大震災での被災状況のリアルさを実感したものの、自分の住んでいる地域での被災は想定できないことが語られていた。

２．訓練および研修会参加を通しての学び（表２）

訓練および研修参加を通しての学びでは、【災害に生かせる応急処置の体験】【地域住民との日頃からの関わりの重要性】【参加団体（職種）の役割を知る】【被災者を支えるボランティア支援の重要性の理解】【被災者と地域住民への配慮の重要性】【緊急場面で求められる医療職の能力】【緊急場面で必要な職種間の連携】【多様な訓練場面設定からの学び】の８つのカテゴリーが抽出された。

以下、１）～３）は訓練参加を通しての学び、４）５）は研修会参加を通しての学び、６）～８）はメディカルラリー参加を通しての学びである。

１）【災害に生かせる応急処置の体験】

このカテゴリーは、＜災害に生かせる応急処置の体験＞の１つのサブカテゴリーで構成されていた。主な内容として、身近にあるものを活用した応急処置の体験を通して、体験していることで災害時に応用が可能になるということが語られていた。

２）【地域住民との日頃からの関わりの重要性】

このカテゴリーは、災害訓練に参加した地域住民との関わりを通して実感した、日頃からの地域住民との関わりの重要性についてのカテゴリーであり、＜地域住民との日頃からの関わりの重要性＞の１つ

のサブカテゴリーで構成されていた。主な内容として、地域住民の災害への関心の高さを実感し、地域のことや地域住民のことがわかっていないと支援はできないことについて語られていた。

３）【参加団体（職種）の役割を知る】

このカテゴリーは、＜参加団体（職種）の役割を知る＞の１つのサブカテゴリーで構成されていた。主な内容として、様々な団体が訓練に参加することで、災害時の動き方が想定しやすくなること、それぞれの団体が果たす役割が把握できることについて語られていた。

４）【被災者を支えるボランティア支援の重要性の理解】

このカテゴリーは、＜被災者を支えるボランティア支援の重要性の理解＞＜被災者を支えるボランティアがうまく機能するための体制作り＞の２つのサブカテゴリーで構成されていた。

＜被災者を支えるボランティア支援の重要性の理解＞では、≪被災者を支えるボランティア支援の重要性の実感≫、≪被災者を支えるボランティア支援のための組織の重要性≫、≪ボランティアを支援する看護職に必要な能力≫等が語られていた。＜被災者を支えるボランティアがうまく機能するための体制作り＞では、≪組織立ち上げの難しさ≫、≪ボランティア組織の体制構築の実際≫、≪ボランティア組織の体制構築に必要な支援者間の連携≫について語られていた。

５）【被災者と地域住民への配慮の重要性】

このカテゴリーは、＜被災者を常に中心に考えることの重要性＞＜被災から免れた人に対する配慮の重要性＞＜被災者の立場での被災者支援の大変さ＞の３つのサブカテゴリーで構成されていた。

＜被災者を常に中心に考えることの重要性＞では、ボランティア活動をする上で被災者のニーズを常に中心におくことの重要性が語られていた。＜被災から免れた人に対する配慮の重要性＞では、被災者だけでなく≪被災から免れた人に対する配慮の重要性≫が語られていた。＜被災者の立場での被災者支援の大変さ＞では、被災者でありながらボランティア組織の運営に携わることの大変さについて語られていた。

６）【緊急場面で求められる能力】

このカテゴリーは、＜状態の変化の予測＞＜緊急時の優先度の判断＞＜緊急場面に求められる能力＞＜緊急場面で必要な効率性＞＜緊急時の被災者への声かけの重要性＞の５つのサブカテゴリーで構成されていた。

＜状態の変化の予測＞では、≪状態の変化に応じた適切な対応≫が求められること、≪状態の悪化を予測しておくことの重要性≫について語られていた。＜緊急時の優先度の判断＞では、≪緊急時の優先度の判断の難しさ≫や、≪少ない情報からの判断≫を求められることが語られていた。＜緊急場面に求められる能力＞では、緊急場面では多くの知識・技術が必要となること、まだ対応できる能力が不足していることについて語られていた。＜緊急場面で必要な効率性＞では、情報収集を効率的に行うことの大切さについて語られていた。＜緊急時の被災者への声かけの重要性＞では、被災者を安心させる声かけの重要性について語られていた。

７）【緊急場面で必要な職種間の連携】

このカテゴリーは、＜緊急時の各職種の担う役割＞＜緊急場面で必要な職種間の連携＞の２つのサブカテゴリーで構成されていた。

＜緊急時の各職種の担う役割＞では、≪緊急場面で必要な指示者の役割≫、≪緊急時に看護師に必要とされる役割≫として指示者への連絡報告や軽症者への対応を中心とした役割を担っていたことが語られていた。＜緊急場面で必要な職種間の連携＞では、各職種ができることを理解した上での連携の重要性、常に声をかけ合うことの重要性について語られていた。

８）【多様な訓練場面設定からの学び】

このカテゴリーは、＜多様な訓練場面設定からの学び＞の１つのサブカテゴリーで構成されていた。主な内容として、多様な訓練場面が設定されていたことで、対応の違いについて学ぶことができたことが語られていた。

３．災害看護についての今後の学習への関心（表３）

災害看護についての今後の学習への関心では、【被災者のケアへの関心の高まり】【訓練参加の必要性】【被災者の支援に必要な能力の不足】【応急

表２　訓練および研修参加を通しての学び

（　）コード数

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
災害に生かせる応急処置の体験（8）	災害に生かせる応急処置の体験（8）	応急処置の体験（3）
		応急処置の災害時への応用の可能性（4）
		応急処置の災害時への応用の難しさ（1）
地域住民との日頃からの関わりの重要性（7）	地域住民との日頃からの関わりの重要性（7）	地域住民の災害への関心の高さを実感（2）
		地域住民との日頃からの関わりの重要性（4）
		最悪の事態を想定しての訓練の重要性（1）
参加団体（職種）の役割を知る（3）	参加団体（職種）の役割を知る（3）	様々な団体が訓練に参加することでのメリット（2）
		災害時の各職種の活動の理解（1）
被災者を支えるボランティア支援の重要性の理解（21）	被災者を支えるボランティア支援の重要性の理解（14）	被災者を支えるボランティア支援の重要性の実感（6）
		被災者を支えるボランティア支援のための組織の重要性（4）
		ボランティアを支援する看護職に必要な能力（1）
		災害における保健師の役割の多様性（1）
		ボランティアの表に出にくい役割の重要性（2）
	被災者を支えるボランティアがうまく機能するための体制作り（7）	前例がないところからの組織立ち上げの難しさ（3）
		被災者を支えるボランティア組織の体制構築の実際（2）
		被災者を支えるボランティア組織の体制構築に必要な支援者間の連携（2）
被災者と地域住民への配慮の重要性（7）	被災者を常に中心に考えることの重要性（4）	被災者を常に中心に考えることの重要性（3）
		被災者のニーズに沿ったボランティア活動の重要性（1）
	被災から免れた人に対する配慮の重要性（2）	被災から免れた人に対する配慮の重要性（2）
	被災者の立場での被災者支援の大変さ（1）	被災者の立場での被災者支援の大変さ（1）
緊急場面で求められる能力（13）	状態の変化の予測（2）	状態の変化に応じた適切な対応（1）
		状態の悪化を予測しておくことの重要性（1）
	緊急時の優先度の判断（3）	緊急時の優先度の判断の難しさ（2）
		少ない情報からの判断（1）
	緊急場面に求められる能力（3）	緊急場面に求められる能力（2）
		緊急場面に求められる能力の不足（1）
	緊急場面で必要な効率性（2）	緊急場面で必要な効率性（2）
	緊急時の被災者への声かけの重要性（3）	緊急時の被災者への声かけの重要性（3）
緊急場面で必要な職種間の連携（11）	緊急時の各職種の担う役割（6）	緊急場面で必要な指示者の役割（4）
		緊急時に看護師に必要とされる役割（2）
	緊急場面で必要な職種間の連携（4）	緊急場面で必要な職種間の連携（2）
		救急時の職種間の連携の重要性（1）
		緊急時の各職種間での声かけの重要性（1）
多様な訓練場面設定からの学び（4）	多様な訓練場面設定からの学び（4）	ラリーの場面設定（1）
		様々な緊急場面からの学び（3）

処置の習得への意欲】【ボランティア活動への意欲】の５つのカテゴリーが抽出された。

１）【被災者のケアへの関心の高まり】

このカテゴリーは、訓練や研修会参加を通して高まった被災者のケアへの関心についてのカテゴリーであり、＜医療が必要な被災者のための退院後のフォローの必要性＞＜被災者の心のケア＞＜被災者のニーズの把握＞＜災害時の保健師活動への関心＞の４つのサブカテゴリーで構成されていた。

＜医療が必要な被災者のための退院後のフォローの必要性＞では、医療施設と地域での被災者の情報共有の必要性が語られていた。＜被災者の心のケア＞では、≪専門職として心のケアに取り組みたい≫という希望が語られていた。＜被災者のニーズの把握＞では、ニーズ把握が困難な被災者のケアの必要性や、学生であっても被災者のニーズを把握しそれを伝達する役割が担えることについて語られていた。＜災害時の保健師活動への関心＞では、あまりイメージできていない災害時の保健師活動に同行したいという希望が語られていた。

２）【訓練参加の必要性】

このカテゴリーは、＜訓練参加の必要性＞の１つのサブカテゴリーで構成されていた。主な内容として、災害への備えとしての訓練参加の必要性が語られていた。

３）【被災者の支援に必要な能力の不足】

このカテゴリーは、＜被災者の支援に必要な能力の不足＞の１つのサブカテゴリーで構成されていた。主な内容として、災害時に必要な医療を提供する能力の不足や被災者支援への自信のなさが語られていた。

４）【応急処置の習得への意欲】

このカテゴリーは、＜応急処置の習得への意欲＞の１つのサブカテゴリーで構成されていた。主な内容として、日常生活で使える応急処置の習得への意欲が語られていた。

５）【ボランティア活動への意欲】

このカテゴリーは、＜ボランティア活動への意欲＞の１つのサブカテゴリーで構成されていた。主な内容として、自分にできることから参加したいことが語られていた。

Ⅵ．考察

１．災害看護についての学習経験や活動経験の実態

大学の授業の中での学習経験の少なさと、ボランティアや訓練参加などの活動経験の少なさについて述べる。当学のカリキュラムの中で災害看護の科目がまだ開設されていないこと、災害看護の内容を１つの柱として盛り込んだ科目がないことから、各授業の中で語られた内容を断片的に覚えている程度であることがわかった。また、大学と近接する地域で２年前に豪雨災害が起こったが、身近で災害が発生したにも関わらず学生の災害への関心は低く、ボランティア活動や訓練参加の行動に結びついていないことがわかった。その背景には自分の生活に影響がないことでの危機感の薄さがある。漠然とした危機感は抱いているが災害に備えて何ができるかまでは考えていない現状がある。また、地域住民との関わりが希薄であることに対しての危機感も薄く、ボランティアや訓練参加などの活動経験がないことで、地域住民間の災害時の助け合いの必要性について実感が持てないでいることがわかった。

一方で、身近に発生した災害により自分や家族の生活に影響があった学生は、ボランティア活動への関心も高く、ボランティア活動への参加に結びついていた。そしてボランティア活動に参加したこと

表３　災害看護についての今後の学習への関心　（　）コード数

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
被災者のケアへの関心の高まり（8）	医療が必要な被災者のための退院後のフォローの必要性（3）	医療が必要な被災者のための退院後のフォローの必要性（3）
	被災者の心のケア（1）	専門職として心のケアに取り組みたい（1）
	被災者のニーズの把握（3）	ニーズ把握が困難な被災者のケアの必要性（1）
		被災者のニーズを把握する役割（1）
		把握した被災者のニーズを伝達する役割（1）
	災害時の保健師活動への関心（1）	災害における保健師の活動への関心（1）
訓練参加の必要性（5）	訓練参加の必要性（5）	平時からの訓練の必要性（2）
		訓練参加への意欲（1）
		地域とのつながりを深めるための訓練参加への意欲（1）
		ラリー参加への意欲（1）
被災者の支援に必要な能力の不足（7）	被災者の支援に必要な能力の不足（7）	被災者への支援の困難さ（3）
		具体化できない（1）
		災害時に必要な医療を提供する能力の不足（1）
		被災者への支援への自信のなさ（1）
		知識の不足を実感（1）
応急処置の習得への意欲（3）	応急処置の習得への意欲（3）	救急時の対応についての知識の習得（1）
		止血方法の習得（1）
		日常生活の中での応急処置を身につけたい（1）
ボランティア活動への意欲（6）	ボランティア活動への意欲（6）	ボランティア活動への意欲（5）
		救援物資の仕分け（1）

で、さらに災害看護への関心が高まっていた。

災害看護の理解につながった経験としては、主にボランティア活動などの活動経験、災害看護の実際を見聞きした経験、メディアからの情報を見聞きした経験があげられた。

まず活動経験として、災害ボランティアを経験することで、ボランティアが活動しやすい体制づくりについての気づきや被災者の置かれた環境に配慮したボランティア活動についての気づきにつながっていた。活動内容を問わずボランティア活動を経験することで被災地域や被災者のニーズがわかり、今後の活動につながる課題も明確化されていた。

次に災害看護の実際を見聞きした経験では、特に被災者からの身近な被災体験を聞くことで、災害時要援護者への影響の大きさや心のダメージの深さなどをリアルに感じることにつながっていた。また、メディアからの情報を見聞きした経験では、東日本大震災の被害の甚大さがメディアを通して連日伝えられたことから、学生にとっては被災者の状況はもちろんのこと、看護職の活動についても理解するきっかけになっていた。

以上のような災害看護についての理解の深まりは関心の高まりにもつながっていた。前述のようにボランティア活動への参加をきっかけとして災害看護への関心が高まり、今回の災害訓練への参加にも結びついていた。また、身近な被災体験を聞くことによっても、他人事のように感じていた災害を身近に感じ、今回の災害訓練への参加に結びついていた。病気をかかえた被災者の置かれた状況と支援活動についての話を授業で聞いた経験も、災害時要援護者への支援の重要性に関心を向けるきっかけになっていた。このように災害看護について理解するきっかけがあることが関心の高まりにつながり、実際の行動につながってくるため、理解が深まるよう様々な機会を提供することが課題である。

2．訓練や研修会への参加による学び

1）災害看護への理解の深まり

学びの大きな柱として、ボランティア支援についての理解の深まり、緊急場面でのチーム医療についての理解の深まり、地域住民との日頃からの関わりの重要性についての理解の深まりについて述べる。

（1）ボランティア支援についての理解の深まり

災害看護の中でも被災者へのケアは重要な部分を占める[7]が、ボランティア支援も被災者の支援につながる重要な支援である[8]ことを学んでいた。ボランティア支援における看護職の役割として重要になるのがボランティアの体調管理である。ボランティア活動は、慣れない地域でのがれき処理などの屋外の活動が多く、熱中症など体調を崩すリスクや、怪我をするリスクも高くなるため、現場での体調のチェックや予防対策が重要となる。看護職としてボランティアの体調管理にあたることでボランティア活動を安心して行うことができ、それが被災者への支援につながっていることを学んでいた。しかし、ボランティアの体調管理が主な活動であるため、被災者支援活動の実際がみえないことでの葛藤も生じやすい[9]。そのため、ボランティア支援と被災者支援活動とは連動していることを理解しておくことが重要である。今回の訓練や研修会への参加を通して、被災者のケアへの関心も高まっていたことから、被災者へのケアについても経験できる機会を作っていくことが課題である。

また、ボランティア支援における支援者間の連携の重要性についての学びも深まっていた。このような支援者間の連携や情報の共有の重要性は、他の災害看護活動場面でも共通することであり、今回の学びは、被災者支援における他職種との連携を考える上でも重要な学びであると考える。

（2）緊急場面でのチーム医療についての理解の深まり

看護学生が被災者役で災害訓練に参加したことでの学びについての報告[10)~12)]は多くなされている。被災者役の立場でとらえた、医療者の緊急場面での対応についての学びとして、患者に関心を寄せながら、知識と共にスピードが求められること、チームワーク・役割分担、連携を図ることが重要であること[13)]に学生が気づいたことが報告されている。今回の学生の学びの中でも、緊急場面で医療者に求められる能力として、状態の変化を予測する能力、優先度を判断する能力、効率的に行動すること、被災者への声かけの重要性などがあげられていた。

また、緊急場面での職種間での連携の重要性として特に、各職種の役割を理解して行動すること、緊急場面での司令塔の役割の重要性をあげていた。今回、見学者としてメディカルラリーに参加したことで客観的に医療職者の実際の対応を見ることがで

き、このような学びにつながったと考える。一方で、災害時に必要な医療を提供する能力の不足も実感しており、多くの知識と経験を積むことの大切さについても学んでいた。看護学生が役割分担してトリアージの実践体験をした学び[14]によると、災害看護の役割意識が明確化され、現段階でできることや今後学習したいことが明確になったと報告されている。体験学習を通して学習への取り組みがさらに主体的になることからも、看護学生として可能な体験学習の導入についても検討が必要と考える。

（３）地域住民との日頃からの関わりの重要性についての理解の深まり

災害訓練に参加した地域住民の関心の高さを実感し、地域住民との関わりを日頃から持つことが災害時の助け合いにつながることを学んでいた。地域住民との関わりが希薄であることに対しての危機感の薄さは、地域住民との交流を通して改善されるものと考える。看護学生の防災意識についての研究[15]によると、防災意識の影響要因として、地域行事への参加意思や居住地域への愛着、家族や友人との会話など、身近なことと強い関連が認められたことが明らかになっている。そのため、居住地域との関わりを持つこと、居住地域での災害経験から学ぶことで、地域の中での役割意識やボランティア意識を高めていくことが必要と考える。

２）災害看護への関心の高まり

災害看護への理解の深まりが、災害看護への関心の高まりにつながっていた。被災者のケアとして学生ができることは、ボランティア活動を通して被災者のニーズを把握しそれを専門職につないでいくことであるという語りからも、被災者のケアへの関心の高まりにつながっていた。また、訓練で応急処置を体験することで、応急処置についての知識と技術が不十分であることを実感し、現場で活用できる応急処置への関心の高まりにつながっている。災害時にはすぐに使える医療物品がそろわないことが予測されるので、身近にあるものをどう活用するのかの知識は大切である。このような学習の機会を取り入れていくことが課題である。

Ⅶ．結論

１．災害看護の学習経験や活動経験では、【これまでの災害看護の学習経験や活動経験】【災害ボランティア体験を通してみえてきたもの】【災害看護の実際を見聞きすることでの理解の深まり】【災害看護への関心の高まり】【日頃からの地域住民との関わりの希薄さ】【災害に対する危機感の薄さ】の６つのカテゴリーが抽出された。

２．訓練および研修参加を通しての学びは、【災害に生かせる応急処置の体験】【地域住民との日頃からの関わりの重要性】【参加団体（職種）の役割を知る】【被災者を支えるボランティア支援の重要性の理解】【被災者と地域住民への配慮の重要性】【緊急場面で求められる医療職の能力】【緊急場面で必要な職種間の連携】【多様な訓練場面設定からの学び】の８つのカテゴリーが抽出された。

３．災害看護についての今後の学習への関心では、【被災者のケアへの関心の高まり】【訓練参加の必要性】【被災者の支援に必要な能力の不足】【応急処置の習得への意欲】【ボランティア活動への意欲】の５つのカテゴリーが抽出された。

４．訓練や研修会への参加を通して、ボランティア支援についての理解の深まり、緊急場面でのチーム医療についての理解の深まり、地域住民との日頃からの関わりの重要性についての理解の深まりにつながっていた。理解の深まりが学習意欲や関心を高めることにつながる。よって、様々な経験の機会を教育に取り入れていくことが必要である。

引用文献

１）小原真理子、酒井明子監修：災害看護　心得ておきたい基本的な知識、南山堂、P.210-213、2007

２）畑吉節未, 米谷淳：体験を学びに変える災害看護基礎教育プログラムの評価　災害訓練体験後10ヵ月の学生の手記をもとに、日本看護学会論文集：看護教育38号 P.243-245、2008

３）新見綾子、堀井直子：大規模災害訓練の看護基礎教育における活用の検討—負傷者として参加した看護学生の体験から—、日本看護医療学会雑誌

６（2）P.23-32、2004.
４）畑吉節未：経験学習理論に基づく災害看護教育プログラムの開発、日本災害看護学会誌９（3）、P.10-23、2008
５）坊田香織, 横内光子, 岡田淳子, 藤本浩子, 中信利恵子, 堀理江, 植田喜久子：看護学生の災害トリアージ訓練の結果からみた教育的課題、日本災害看護学会誌９（2）、 P.25-39、2007
６）百田武司、中信利恵子：避難所疑似体験演習の効果と課題　参加者へのアンケート調査より、日本赤十字広島看護大学紀要11巻、P.1-9、2011
７）前掲１）P.118-164
８）野口宣人、酒井明子：災害復旧活動におけるボランティアコーディネーターの心身の経過別変化と対処方法、日本災害看護学会誌、７（3）、P.2-15、2006.
９）野坂久美子、原田秀子、中谷信江、後藤みゆき：山口県内における豪雨災害発生時の看護職の役割と課題（第一報）防府地区における豪雨災害支援ボランティア看護職の経験から、山口県立大学学術情報３号、P.57-70、2010
10）山田良子、大野澄子：病院の災害訓練に参加した看護学生の学びと課題　救護班役・マスコミ役・撮影係で参加した看護学生の学びから考える、日本看護学会論文集: 看護教育40号、P.266-268、2010
11）前掲１）
12）成瀬かおる, 高橋順子, 中山富子, 井上真弓, 瀬下文子, 高倉裕美子, 加藤奈保美, 白尾久子：総合防災訓練に負傷者役で参加した看護学生の重症度による学びの違い、日本看護学会論文集　看護教育38号、P.111-113、2008
13）前掲10）
14）粕谷恵美子：看護学生間の教授法による災害看護の演習からの学び　学生同士による学習の効果、日本看護学会論文集 地域看護39号、P.215-217、2009
15）松清由美子, 野村志保子, 森本紀巳子：看護学生の防災意識とその影響要因、日本災害看護学会誌10巻３号、P.36-49、2009